



第257號 (第 22 卷)

(昭和17年) 第 11 號

卷頭

隨筆

## PLUTO の譯名について

On the Translation of "Pluto."

山 本 一 清 *Issei Yamamoto.*

久しぶりで、上智大學總長土橋八千太師が天文月報の本年度第9號にブルート1の日本語譯のことを、“論叢”として書いてゐられる。いよいよ東京方面でも、片カナを棄てゝ本式の和譯名を用ゐるやうになつたのかと思つて讀んで見ると、それほどの“論”でもないらしい。第一、外國で Pluto といふ名が採用された事情を師は知つてゐられないらしい書きぶりである。それから、“冥王星”といふ名を、既に東亞天文協會に習つて、支那の天文學界が正式に採用してゐることも知つてゐられないらしい。(支那の或る天文臺で數十年も働いてゐられた經歷の同師であるのに!!)

そもそも Pluto は、1930年三月に其の發見が公表せられ、同年五月末には、既に其の名が發見者(ローエル天文臺)によつて命名されたものであつて、詳しい事情は天界 110 號あたりに載せられてある。Pluto といふ名を提議したのは、學都オクスフォードに住む11歳の Venetia Burney 嬢で、これをローエル天文臺に電報で取り次いだのはオクスフォード大學天文臺長 H. H. Turner 博士であつた。ローエル天文臺長が此の名を採用したのは、この名がギリシヤ神話中の幽冥界の支配者の名であつて、星の微光を象徵するのに適當であること、尙又、この星の學符號を PL と定めれば、これは恰も故 Percival Lowell 博士の名の頭字の組み合はせになつてゐること——此の二つの理由によるのである。(當時、或る方面からは、Minerva といふ名も提案せられたのであるけれど、この名は小遊星にも既に採用せられてゐるといふ理由で、採り上げられなかつたことも、公表されてゐる。)

さて、この Pluto の和譯名であるが、これについては、小遊星の和名が全部カタカナで呼ばれてゐる如く、Pluto もカタカナで呼ぶといふのも一方法である。現に東京天文臺では、今日まで12ヶ年間、カタカナで呼んでゐた。しかし、吾々は、此の星が苟しくも一つの大遊星として、世界の天文曆書などにも載せ

られる以上、何時までもカタカナや、“超海王星”といふ呼び名は面白くないと考へてゐた。恰も、野尻抱影氏が“冥王星”又は“幽王星”といふ譯名を提案せられたので、語呂の點も考へて、吾人は“冥王星”を採つたのである。そして、間もなく、支那の天文學界でも此の“冥王星”を正式に採用したのである。

Pluto は、ギリシヤ神話に有名な幽冥界の支配者の名である。歐米人は誰一人これを知らぬ者は無い。その名の第一印象は、何となく一種の氣味悪さを感じる。土橋師は大英百科全書の記事を主にして、可なり詳細に此の神の素性を説明してゐられる。神話に據れば、天界はウラノス神が、海はポセイドン神が、又、地下界はプルト神が支配し、そして、地上はゼウス神の管轄下にある。これは、すべての神話書に書いてある所であつて、甚だ明瞭であるが、土橋師は少しく筆を略してゐられるので、何も知らない者は疑はしい書きぶりである。とにかく、プルト神は地下界の神であつて、地上の主ではないのである。

つぎに、土橋師は、プルト神の性格を記した一部に、この神は、後代に“嚴刻無慈悲”から“慈善”や“富”の神となつた點を強調してゐられる。なるほど、英語にも Plutocracy (金力政治) などといふ字があるのであるから、Pluto 神の性格は陰惨な方面ばかりではなくなつたことは肯かれる。しかし、Plutonian とか、Plutonic とか、Plutonism とか言つた言葉を辭書を引いて見ると、果して富貴的な樂天的な印象を獲られるか、どうか？

とにかく、歐米人たちが、幼少の時代から聞いたり讀んだりして知つてゐる Pluto は、第一義がむしろ陰惨な世界の王であつて、これは百人が百人ながら否定出来ないものである。新天體の命名の提起者たる Burney 嬢も此の意味を念頭に置いたものであらうし、又、この名を決定採用したロエル天文臺長等も、この名によつて、容易に見えない幽冥界の微光星といふ觀念を、腦裏に有つてゐたことは肯かれる。——之れに對して、Pluto 神を、富貴の主とする觀念は、神話としては後代の姿であり、何としても之は此の神の第二義的、又は第三義的な性格である。今、茲に、Pluto 神の陰惨な性格を A とし、其の富貴的な性格は B とすれば、

(Pluto) - (A) = 0…………… Pluto 神として存在の意義も價值も無し。

(Pluto) - (B) = X…………… “ ” 尙重大なものが残つてゐる。

こういふわけであるから、Pluto 星は、やはり“冥王星”といふ譯が最も適當であると思ふ。——若し百歩をゆづつて、土橋師の所説を傾聴するにしても、“地王星”では無くて、是非“地下王星”としなければならない。

▲今から23年前に逝くなつたハーバード天文臺長 E. C. ピケリング氏が其の研究室に回轉する大卓子を作らせ、永い年月の間、それを愛用してゐたことは學界に有名な話である。自分は同天文臺に勤務中、現臺長シャプリ氏がやはり其の

テーブルを研究用に使用してゐるのを見て、其の便利なことを實見し、歸朝後、何とかして自分も一つ作つて見たいものだと考へてゐた。こんど田上天文臺を設備した中に、この回轉卓子を設計して見た。しかし、工事の都合上、五月の落成式の日に間に合はなかつたのは遺憾であつたけれど、八月に入つてから、愈々この工作を始め、其の月の中旬の16日に出來上つた。其の翌日から第三研究室で毎日使用してゐる。

ピケリングの机は確か八面形であつたと思ふが、自分の研究室の大きさや、窓の都合等もあつて、六角形の設計をした。そして、全體の直径は2米とした。厚さ二寸の松板をつぎ合はせて作り、中心には10種の角柱を立てたもので、脚部にはボールベヤリングを入れたため、研究中に軽くまはり過ぎるほどである。六角形だから、6種類の仕事が同時に出来るわけであるし、其の一コマづつの卓も相當に廣くて、思つたよりも大きい面積である、この経験から見て、どうも八角形の必要はない、六角形で充分だと思ふ。とにかく、ハーパー以外には例の無いもので、これにより、一つ田上の名物が増えたわけである。少くとも、今後、この種の卓子を設計製作される人の参考にはなると思ふ。——中央の柱のまはりに、卓と共に回轉する棚を、やはり六角形で作らせ、こゝには、ペンや、インキや、辭書や、水瓶などを載せてゐる。六方の卓は、書翰を書く部、計算する部、タイプする部、原稿を書く部、讀書する部、簡単な製圖の部といふ風に、今は使ひ分けしてゐるが、この區分は將來どう變るか、使つて見ないとわからない。此の頃は執筆に忙しくて、原稿も二三種のものが同時に進行中なものだから、實は此の六角回轉卓子のほか、もう二つ別の固定の卓子をも使つてゐる。これのため、卓だけでなく、椅子も回轉することにしてゐるが、便利である。

六角形の大卓子は非常に堅牢に出來てゐるので、研究室の隅や、手の届かない壁面の邊に置いてある書籍などを取るためには、この卓の上に乗つて、卓もろ共、舟を漕ぐやうにして、室内をまはるのだが、一寸、小兒らしい遊戲をしてゐるやうで、愉快である。

ピケリングの卓子は、餘りに大き過ぎて、殆んど室全體を占領してゐるやうな感じがあつたが、自分ののは、六角形であるために、研究室の約四分ノ一を占めてゐるに過ぎない。故に、一見して、室をせまくして了つたやうな感じは無い。設計の時は、室との釣り合ひ上、どんなものかと、多少心配してゐたが、出來上つて、實際使つて見ると、非常に便利で、研究上、萬事好都合であることが知れた。これなら、他の人々にも薦められると思ふ。(1942—9—10)

宇野良雄氏(本會理事)は先般應召さる。御武運を祈る。